

世界を変えよう基金報告書

「カンボジアの医療現場の現状」

筑波大学医学群看護学類 4 年 河原崎彩佳

カンボジアの首都プノンペンから車で 1 時間半。気温は 30 度を超え、何もしなくても汗が流れるような気温であった。活動場所へ着くと現地の医療者と日本医療者が笑顔で迎えてくれた。ここで学生の私にどんなことができるだろうか、そう思うのもつかの間、毎日自分の知識や技術以上のたくさんの経験をさせていただいた。

病院は 1 年前に日本人の資金によって設立されたもの。内装はとても綺麗で機器も比較的揃っている。オペ室も分娩室もあり普通の病院。しかし、来院する患者は日本では決して普通とは言えない状態の人ばかりであった。すぐに治療すれば大したことない腫瘍、清潔にすれば自分でも治せる傷、それらを悪化してから病院に来るのだ。病院が近くにない、お金がない、その理由は様々であるがその理由の 1 つに現地の医師を信頼できず、わざわざ日本人医師のいる病院を求めて来るといふ現状がある。

カンボジアは悲惨なポルポト政権を乗り越えた国である。当時、教師や医師、知識あるものは皆平等主義に合わないと言われ、生き残った医療者は約 40 人だったという。焦った国は、1 年間で医師になることを許可する法律を作り、急激に医師を増やした。しかしもちろん皆未熟…。救える命も救えなかった。そして国民の医療者への信頼はなくなっていった。現在、そのような知識のない医師が若者に教育をしているため結局若者も知識は不足。負のスパイラルに陥っている。この国に必要なのは国民の医療者に対する信頼であると感じた。

また、公衆衛生の知識の充実も課題である。病室に飛び交うハエ、傷口に侵入するアリ、鼻をつくような臭いのするトイレ。現地の人はそれが当たり前すぎて何も感じていない。なんと恐ろしいことであろうか。公衆衛生に関する知識が人々に身につくことができれば、未然に防ぐことのできる病気は多くある。ほんの少しでも清潔の概念を変えられることができれば…国民の医療者への信頼が向上すれば…この国にはたくさんの課題と可能性があると感じた。

しかし一方で良い面もある。それは日本よりはるかなか家族を大切にする国であること。家族の 1 人が入院となれば家族全員と一緒に入院。常に病室は患者の何倍もの人で溢れていた。治療はまるで看護師のように家族が補助に入ってくれる。もっと家族を取り巻いたケアの形あるのではないかと思った。

今回のボランティアはボランティアとは何か、支援とは何か、を原点に戻り考える機会となった。

開発途上国への支援というどうしても一方的に何かをするというイメージになってしまう。しかし、それでは世界を変えることはできない。まずはその国の文化、慣習を理解しようとする。それからその国の良さを知り、それらを引き出し活かすことで、国はよりよくなるのだと思う。今後もっと開発途上国の人々が自分の国の良さや秘めた力に気づき、自発的になってほしいと思う。私はその良さや力を引き出す人になっていきたい。